

研究通信

No. 59

1967.11刊
村落社会研究会
事務局東京教育大学
文学部
社会学研究室内

第十五回大会を終り

事務局退陣あたつて

昨秋、何ということなしに事務局を引受けてしまった。『村研』からはどんな注文でも「ノー」といえない立場はつらい。が、このときだけは「果して会員の期待どおりやれるか」という不安があった。ところが誰かがいいた。「君はいつも旗振りだけじゃないか」まことにごもつとも。今回も案の定、中田君には委員として事務局業務を、牧野君にはフリーで大会準備を分担して頂き、後藤禪大を相談役に据え、私は例によつて「旗振り」にまわってしまった。慚愧に堪えない。

予想通り、後藤相談役の指導よろしく、「通信」の発行、名簿整備、会費徵収にみせた中田委員の腕はすばらしかったし、事務局最大の難問、大会開催は、牧野君の天才的センスでまず演出運営は満点との評判で「旗振り」はすっかり安心した。しかも二日目の伊良湖国民休暇村での報告と討議は、和氣と活気にあふれ、「君達帰るつもりがあるのかい」と質問したいほど、裏方は財布の関係もある。

てハラハラしたとか。何がそうさせたのか。会の内容は省略するとして、「すばらしかった」「有難う」という讃辞やお礼状を山ほど、というと嘘になるが、ともかく沢山頂き、「今年の欠席者は損をした」という噂さえあるとか、いさか自画自讃とはいえ喜んで退陣することができました。十五年を経た村研、農村問題は主題こそかわれ、いよいよ重大になりつつあります。来年の課題と事務局に期待して拙筆します。ご協力ほんとうに有難うございました。

(川越淳二記)

年報第四集の原稿を公募します

○応募申込 ノ切は十二月十日(応募者氏名・住所に仮題ないし論文の内容を示す若干の説明を付した端書(東大社会学研究室福武直委員あて)で結構です。

なお原稿ノ切は来年二月末日厳守のこと。

右についての関係記事は、運営・編集合同委員会報告中あります。あるつて応募を御申出下さい。

運営・編集合同委員会記事

昭和四二年一〇月の大会後における昭和四三年度村研第一回運営委員会は、四二年一月二日(木)午後六時より慶應義塾大学塾監

局第一会議室において、第二回編集委員会との合同で開かれた。

同日は、前年度事務局を代表してわざわざ中田実氏は名古屋より出席下さり、また同様に余田博通氏は神戸より他の御所用を兼ねて遠路出席いただいた。他は東京在住の、小池基之、福武直、中野卓、蓮見音彦、布施鉄治、安原茂、米地実、柿崎京一の各氏の出席をえた。また、後述のように松江市より山岡栄市氏、福岡市より中村正夫氏の御意見が寄せられ、以上の各委員の参加をえて新年度の村研運営につき議事が進められた。その内容、結果は次のような。

一、昭和四三年度事務局の件、去る十月五日の総会で、次回事務局

として、中央大学と法政大学の共同案が承認されたが、両大学の会員の都合をつけることが困難とわかり、あらためて検討した結果、東京教育大学文学部中野卓委員および図書館短期大学柿崎京一委員の共同で事務局を引き受けることに決定し、正式に依頼した。これに伴って、事務局担当大学より、北原竜二会員を新たに運営委員に加えることを承認した。

尚、これまで設けられていた「村研運営委員会東京連絡所」は、

四三年度（四二年十一月より）は東京教育大学文学部社会学研究室室長付、村落社会学研究会事務局に吸収した。

一、編集委員会のセンターは、引き続き四三年度も東京大学文学部

社会学研究室室長付福武直委員長のところにおくことを確認した。

従つて、年報第四集の投稿申込み、原稿の送り先等は右のセンター宛発送されたい。

一、年報第四集の編集について、第一回の編集委員会において決定

した内容を再確認した。即ち

- ・論文の原稿については、

(1) 申込〆切を四二年十二月十日とする

(2) 原稿〆切は四三年二月末日とする

(3) 原稿枚数 四〇〇字詰 約八〇枚

(4) 原稿申込、および送先

東京大学文学部社会学研究室 福武直氣付
東京都文京区本郷七丁目

村研編集委員会

研究動向の原稿については第一回編集委員会で執筆依頼した、左記の方々の承諾をえました。

「社会学」 中田 実（愛知大） 名古屋市昭和区天白町
野並字境根相生山住宅二二二
五〇三

「経済学」 井上完二（農工大） 三鷹市下連雀二七一

「経済史学」 岩本由輝（山形大） 山形市南館字富南一〇二五
南館住宅

「民族学」 村武精一（都立大） 東京都目黒区八雲一一一

「法学」 宮崎俊行（慶應大） 東京都杉並区善福寺一一二二
一三

(1) 原稿〆切 四三年四月末日

(2) 原稿枚数 四〇〇字詰 約十五枚

(3) 原稿送先き 論文原稿の場合と同じ

尚、第四集に掲載する研究動向は、昭和四二年四月一日より翌四年三月末日の一年間の研究動向を中心執筆してもらうことになつてゐる。つきましては、執筆者の方々へ、右の期間に発表さ

れた論文等の「抜刷」を寄贈して下さるよう、若し抜刷のない場合には、論文の掲載した本、雑誌名を教えてもらいたい。

一、本年度の運営について

前年度事務局から引きつがれた内容の検討を基礎にして、本年度運営の仕方にについて検討した。とくに研究通信発行、大会運営、会費納入実績等について討議され、本年度になじうる課題について話し合がなされた。

一、会費の納入方法及び実績について

会費の納入先は、口座番号をとっている関係で引き続き慶應大学にお願いすることになった。

郵便振替　口座番号　東京八〇二二七

名　　称　　村落社会研究会

従来までの会費（年五〇〇円）の納入状況は、別表のように、良くなありません。研究会の今後の活動に支障を来たすことを憂慮され、会費滞納額の整理を検討し、今後、会費の納入について、会員のより一層の協力をお願いすることにしました。

従来、会員の名簿、会費、納入実績は、大抵帳式であったが、前年度事務局（愛知大学）のお骨折りで、会員一名ごとのカード方式にあらためられ、各会員ごとの住所・所属変更並びに会費納入実績が一見して判るようにになった。

尚、滞納額の処理方法その他については別記の通り決定した。

一、村落社会調査研究叢書の出版計画について

福武委員より別記のように、会員の調査研究報告の叢書の出版

計画の提案があった。委員会としては、この計画を歓迎するとともに、村落社会研究に一層の成果の上ることを期待した。

一、前年度大会の反省と今年度の運営について

本年度の大会の共同課題のテーマは、一応、前年度のテーマを継続するとしても、その継続の意味、内容を検討する必要のあることが確認され、当日、残された時間を利用して、前年度の反省と今年度の運営について討議がなされた。

山岡栄氏より本年度大会運営についての反省として「事例発表者が少し多すぎて討論の時間が少なかったこと、討論の焦点づけが足りなかったこと」の指摘が寄せられているとおり、「報告、討議が必ずしもテーマに則していたとは云えなかつた」、「商業資本の討議に前半集中し、時間が少なかつたので後半に結びつかなかつた」ということから、四三年度にも同じ共同課題を継続するについては、「報告者の数を三人位にしほって、討議時間をもつと多くした方がよい」、「共通課題の報告者の決定が遅すぎるから、もつと早くきめ、大会前までに報告内容について討議する機会を多くする」「本年度の共通課題について会員から研究通信に投稿を依頼し、誌上討議を続けていくとよい」などの課題が出され、結論として本年度の共通課題をきめるための研究会を東京では一二月か一月に開くことにした。当時は島崎穂氏に討議のきっかけとなるような報告を依頼することとなつた。（別記「研究会通知」参照）。

右、研究会は東京で開かれる予定のほかに、九州でも計画されている。すなわち、中村正夫委員より、「数名の同学とも語り合い、

合宿研究会のようなフィールドワークと研究会を兼ねたような会合を年一回開催すべく準備をすすめることとしたい」という話があることが紹介された。各地にこの種の活動が起り、それが大会へ盛上げられていくことを期待したい。

次回研究通信は一月下旬ないし、二月に入つて早々お手元に届くようにしたいが、その中で、研究会記事を掲載し、共同課題継続の主旨を一層意義あるものとするための討議が各地に開始され本紙上にもそれを反映させたいものと考える。

編集委員会（第一回）

第一回村研編集委員会は、これまで二〇月の大会終了後、年末近く行われることが多かつたが、少しでも早く公募を開始し編集らしい編集を行ふことのできるようという考え方から、大会終了直後、大会第二日目、昭和四二年一〇月六日午後八時より、大会開催地「しおさい荘」において行われた。出席委員は、小池基之、福武直、中野卓、島崎裕、蓮見音彦、安原茂、米地実、柿崎京一の七委員、および当日、小池委員と共に共同討議の議長をつとめた余田博通氏にも出席を依頼し、合計八名で次のような議事がおこなわれた。

年報第四集の編集方針について

一、原稿公募を次回の「研究通信」に載せて、早い時期に、原稿を集め、年報に掲載すべき原稿を委員会で検討して確定する。その

ため、原稿の〆切日を昭和四三年二月末日とする。本年度の大会報告者への原稿依頼についても検討され、これらの原稿についても、その取扱いは前記の方針に従うこととした。

二、年報第四集の「研究動向」の原稿については、「社会学」（中田実）、「経済学」（井上完二）、「経済史学」（若本由輝）、「民族学」（村武精一）、「法学」（宮崎俊行）の五つの分野について五名に方々に執筆を依頼することにした。尚、原稿は四〇字詰一枚、ノ切は、昭和四三年四月末日と決めた。

村研年報第三集について

村研年報『村落社会研究第三集』は既に塙書房より会員各位あてお知らせしたはずと存じますが、第三集（定価一五〇〇円）を未だ入手されていない会員は、村研会員なることを付記して（一五〇円を塙書房あて御送金され次第送本してくれることとなっています。なお、第一集（定価一〇〇〇円）は一〇〇〇円、第二集（定価一四〇〇円）は一二〇〇円で同様に扱います。）

振替口座は東京八七八二、宛名、東京都文京区本郷三丁目六一〇、塙書房です。

研究会開催案内

一、日時 一月二十二日、午後一時～四時

一、場所 赤門榜 学士会館三号

一、共同課題の展開をめぐって 報告者 島崎

右の報告をめぐる討議に会員各位の参加をまつ。

昭和四二年度会計決算報告

前年度（事務局・愛知大学文学部社会学研究室）の会計決算
1966.12.1 - 1967.10.31 を報告します。

収入の部		支出の部	
大会参加費(59人×500円)	29,500円	「通信」印刷費(4号)	14,300
宿泊・懇親会費	124,150	送料・通信費	24,825
愛知大学補助金	52,719	備品費(名簿用ペインダー)	1,650
計	206,369	消耗品費	645
		アルバイト代	1,000
		計	42,420
		次年度への繰越金	81,905

○昭和四二年度分まで

(通信 No. 58 号に報告以後一〇月一〇日まで)

○昭和四三年度会費納入	菅野 正	五〇〇円	中川 嘉代子	一、〇〇〇円
	柿崎 京一	一	中田 実	五〇〇円
		五〇〇円	中野 三郎	五〇〇円
		五〇〇円	橋 本 司	五〇〇円
		五〇〇円	遠見 昭彦	二、〇〇〇円
		五〇〇円	谷川 長治	五〇〇円
		五〇〇円	林 原 则	五〇〇円
		五〇〇円	稻 苗 三	一〇〇円
		五〇〇円	敏 雄	五〇〇円
		五〇〇円	宏 宏	五〇〇円
		五〇〇円	吉 米	五〇〇円
		五〇〇円	林 地	五〇〇円
		五〇〇円	澤 四	五〇〇円
		五〇〇円	田 博	五〇〇円
		五〇〇円	登 実	五〇〇円
		五〇〇円	山 原	五〇〇円
		五〇〇円	山 岡	五〇〇円
		五〇〇円	本 栄	五〇〇円
		五〇〇円	登 茂	五〇〇円
		五〇〇円	市 通	五〇〇円
		五〇〇円	村 長	五〇〇円
		五〇〇円	森 利根	五〇〇円
		五〇〇円	宮 常	五〇〇円
		五〇〇円	宮 俊	五〇〇円
		五〇〇円	崎 一	五〇〇円
		五〇〇円	牧 由	五〇〇円
		五〇〇円	野 朗	五〇〇円
		五〇〇円	堀 一	五〇〇円

滞納額	滞納者	滞納総額
4,400円	15人	66,000円
4,100	3	12,300
3,800	2	7,600
3,500	11	38,500
3,200	10	32,000
2,900	12	34,800
2,600	12	31,200
2,300	11	25,300
2,000	9	18,000
1,600	1	1,600
1,500	13	19,500
1,200	1	1,200
1,000	11	11,000
500	7	3,500
計		118人 302,500円

滞納者一一八名は、会員总数二四一名（昭和四二年十月現在）の約五〇%を占め、滞納総額は、三〇万円を超えていて、この滞納額が完納されると、会の運営も財政的に大変楽になることは云うまでもないのですが、既に七年以上の滞納者だけでも四〇数名にのぼり、納入額の高額になることもさることながら、実質的には研究会活動への参加を遠ざかっている方もありますので、運営委員会としては、次のような方式に従い、滞納額の整理を実施することに決意した。

その整理の方針について

1. 昭和三七年度（この年度まで、会費年三〇〇円で、翌三八年度より五〇〇円）までの滞納額を清算にして、昭和三八年度以降の滞納額を徴収する。従って、三八年度以前から滞納していた方

村研の発足以来の会費の納入状況を調べてみた結果、昭和四一年度分までの会費未納の実態は下表のようであった。

うことで、不公平になるし、本年度の大会の前後に三八年度よりさかのぼって滞納額を一括して納入された方に対しても公平な扱いがなされないことに問題はあるとしても、現実にどの時期かに区切りをつけるとすれば避けられないことにもなるので、会員の方々の御了解をえたい。勿論、三七年度以前の滞納額をも納入していただければこれにこしたことはありません。

2. 会費を滞納されている会員に対しては、事務局よりはがきで個人宛、左の記事を印刷して連絡する。

- (1) 滞納額（昭和四一年度まで）
- (2) 今後も会員としての継続の有無
- (3) 納入していただける金額

『村落社会調査研究叢書』

刊行について

村落社会研究会は、御承知のように、『村落社会研究』を年報として刊行しておりますが、貴重な調査報告が、枚数の制約をうけて圧縮されるばかりも少なくないと思います。

そこで、普通なら刊行しがたい調査報告が「村研のモノグラフ」として出版できたらと、つねづね考えておりました。そして、塙書房とも相談を重ね、とりあえず、五十万円の基金をつむことによつて、二冊までは刊行してもらえることになりました。このことを、

先日の運営委員会にはかり、賛成承認していただきましたので、会員のみなさまにお知らせする次第でございます。

一、仮称『村落社会調査研究叢書』は、村落社会研究会の調査報告シリーズとして、年に一冊くらいの予定で随時刊行し、第一冊第二冊と番号をつけて出版する。

一、原稿枚数四百枚以内、約二百頁の大きさとし、各冊ごとに、題目をかかげた出版物とする。たとえば、村野勉著『村落社会の変動過程—長野県南安曇郡豊科町』（村落社会調査研究叢書、第一冊）という形で出版される。

一、著者に対しては、原稿料、印税を支払わない。利益が生じたばあいは、刊行基金にかえしてもらうこととする。

一、基金は、三冊の刊行で費消されてしまうばあいもありうるが、そなばあいは、既刊の成果を訴えて、団体などから寄附をつのる。以上のごとくでありますので、自薦他薦いずれでもよろしいから、この叢書の一冊として刊行したいと思われる候補の名乗りをあげていただきとう存じます。刊行の決定などについては、年報編集委員会がその任にあたることになっております。したがつて御通知は、東京大学文学部社会学研究室内、福武直氣付、村落社会研究会編集委員会あてにお願いいたします。

なお、五十万円の基金は用意してありますので、第一冊目はなるべく早く刊行したいと思います。そして、この叢書の刊行が、村落社会の調査研究を前進させるのに寄与できるよう、会員のみなさまが積極的に御協力下さることを心から期待しておみませ（福武直記）

会員動向

所属変更

○伊藤 章 明星大学人文学部へ

住所変更

○中田 実 ○二宮哲雄 ○山下契姿男

右三会員の新住所は、本号別紙の住所録に掲げた通りである。
所属ならびに住所変更

○岩本由輝 山形大学人文学部へ

(新住所) 山形市南館字富岡一〇二五、南館住宅一一〇四

○大坪省三 茨城女子短期大学へ

(新住所) 千葉県東葛飾郡我孫子町根戸一〇四二、かもめ荘一一号

○星 永俊 愛知教育大学教育学研究室へ

(新住所) 本号別紙住所録参照

住所表示変更

○有賀喜左衛門 神奈川県逗子市久木三一一二一三

○坂井敏郎 大阪府富田林市平町二一五一一

○野口武徳 ○服部治則、本号住所録参照。

会員消息

○故鈴木栄太郎氏の著作集の第一巻(『日本農村社会学原理』の

前半)は、目下、笠森秀雄・布施義治・藤木三千人氏らの編集

で原稿が印刷所へ手渡される直前にはきている由。

新入会員紹介

研究通信58号に紹介以後、入会を申込みました新会員を紹介します。

・鎌田哲宏 北海道大学 小樽市末広町四一

・橋本栄司 武藏野美術大学 東京都北多摩郡久留米町小山一七四

・長谷川昭彦 明治大学農学部 東京都台東区根岸町八一八一 潤本方

・平田順治 福岡社会保育研究所 福岡市上白井町二六二

・若林敬子 東京大学大学院 東京都世田谷区東山野四一二一三 渡辺方

・白樺 久 北海道大学大学院 札幌市手稻東二二九

・西谷能雄 未来社 東京都文京区小石川三一七一二 未来社